

「歩くことができたころのわたし」には負けたくない



ゆき え
● 稲垣幸恵さん (城ヶ入町・25歳)

2003年安城七夕まつりのミス七夕に選ばれる。
車いすのミスは、50回目を迎える七夕まつり史上初。

24歳のときに、スノーボードで転倒し、おそらく寿命を迎えるまで車いす生活を送ることになります。もちろん最初は落ち込んで、親やまわりの人たちにあたりちらし、「死んだ方がいい」と思ったこともありましたが、でも、あるとき、リハビリの病院で出会った同じ車いすの人たちに、さっさと言われたんです。「手が使えるんだからいいじゃん」って。とても元気で明るいその人たちの言葉は、わたしの気持ちを一变させました。車いすだからってできないことはない。あきらめるにはまだ

早い。七夕まつりは子どものころから大好きで、ミス七夕はあこがれの存在でした。入院中のあるとき、何かのきっかけでミス七夕コンテストの話題になり、母が「あなたが車いす姿で人前に出たら、それだけで泣けるほどうれしい」と言っています。「じゃあ、出てみよう」。ミスになることだってあきらめることはない。そして車いす姿の自分をみんなに見てもらいたい。いつしか、そんなことさえ思うようになってい



保育園からの
幼なじみ
杉浦真紀子さん
(城ヶ入町)



みんなを元気にしてしまうその前向きな性格はミスにピッタリ。持っている可能性を全部手にしてしまうゆき、これからわたしを助けてね。

受賞の瞬間は、うれしくて涙が止まらなかったです。こんなわたしを選んでもくれたことにとても感謝しています。ただ、その一方で本当にやっていけないのか心配もありました。でも、その不安はすぐになくなりました。なぜならほかのミスの皆さんが助けてくれるからです。できないことがあってもどうしようかと思うより先に、「こういうときはどうすればいいの?」って声をかけてくれます。みんなとなら、何とかやっていけると思いました。母にも「あなたのために特別にたくさんの方が動いてくれる。いい意味でも悪い意味でも注目される。だから、それ以上にがんばらなきゃ駄目だよ」って言われました。本当にそうですね、わたしはがんばらなきゃいけません。それに、これがわたしの新しい人生の第一歩(第一こぎかな?)にもなるんですから。